

# ら は た 探訪 歴史 クラブ 其の37

地域の文化を彩った画人たち

TAHARA  
History Inquiry  
Club

渡辺杜月（とげつ）は、明治24年野田町で生まれました。一時、野田尋常小学校に勤めましたが、その後農業に従事しました。農業の傍ら、田原町に住む渡辺小華（しょうか）（華山の息子）の弟子、井上華陵（かりやう）、鍋木華国（かこく）を学んでいます。仕事ができない雨の日や農閑期に、歩いて田原まで出ていき教えを受けていました。

彼の作品は、野田町で多く所有されています。墨を基調として描かれたその画風は、前号で紹介した華文のような、観る者のツボをとらえ



杜月が描いた襖絵

る装飾性、技巧性は見あたりませんが、素朴で暖かみのあるものです。布袋さん、寿老人、虎、牡丹、孔雀、鶴など親しみのある定番的な画題のほか、山水画、中国の故事を描いたものもあります。しかし、中国故事の絵は教養がなければ描くことはできません。彼の師たちにはこのような画題は少なく、農業の傍ら一体どのように知識を得ていたのでしょうか。ご家族に聞いてもよくわからないようです。床の間の掛け軸、額、襖絵など新築、お祝いに描かれたも

のが多いと伺います。なんと心温まる話でしょう。杜月は、作品を通じて贈り主とコミュニケーションをとっていたのでしょうか。

杜月は、目を患いながらも、94歳で亡くなるまで精力的に描き続けました。彼は、田原に残る華山の画系を引く最後の人だったのです。昭和51年の正月には、野田市民館主催による彼の個展が開かれました。彼が地元で愛された文化人であったことが忍ばれます。

長谷川栄玉（えいぎょく）は特に注目しています。彼は杜月と同様に、中央の画壇で活躍したプロではありません。寺子屋で教えた後、高松小学校で明治6年から34年まで教鞭をとっていました。その後は、高松町一色で神官をしたという地域を代表する知識人でした。おそらく、同じ赤羽根町の小笠原華文の父、暉山と同



菊を描いた栄玉の掛け軸

世代でしょう。南画は知識人の教養として始められたものと考えられます。田原の井上華陵に学んだと伝わりますが、明治7年頃まで田原に住んでいた渡辺小華にも大きく影響を受けたことでしょう。しかし、これらを示す具体的な資料は見つかっておらず、残念ながら画歴など詳細はよくわかっていません。写真は、伝統的な画題で、菊の清らかな様子が描かれた佳作です。大正時代に描かれたためでしょうか、画風には小華の影響は見られません。近代的な、こなれた作品となっています。栄玉については地元での作品の発掘が必要でしょう。彼は、小華によって盛り上がった明治大正時代の田原画壇が、地域にどのように広がっていったかを示す重要な作家なのです。

（増山）

生涯学習課 ☎ 23局3531